

稀代の天才のはなし



夕刊で面白い記事を発見した。

和歌山県で、南方熊楠（みなかた くまぐす）が写った写真の原板、ガラス乾板 502 枚が発見されたというのだ。

熊楠は明治期に博物学、民俗学、生物学で活躍した稀代の天才である。和歌山県で生まれ、夏目漱石や正岡子規、秋山真之らと現在の東京大学に入学するも、学業そっちのけで菌類研究に明け暮れて退学、米英に留学することとなる。

幼いころから驚異的な記憶力を持ち神童といわれた彼は、やがて英語フランス語はもとよりサンスクリット語まで 19 の言語を操るようになり、「歩く博物館」と呼ばれながら大英博物館に入り浸る。孫文などと親交しながらも菌類などの研究に励み、ネイチャー誌などに多くの論文を投稿している。

しかし、生来の奇行と癪持ちがたたって暴力事件を起こし、大英博物館から出入り禁止の処分を受ける。多くの有力イギリス人がその才を惜しみが、熊楠は失意のうちに 14 年ぶりに帰国し和歌山に居を定める。その後は生涯を在野の学者として菌類などの研究に励み、50 報をこえるネイチャー誌への掲載論文や 10 種の新種を発見するなど変形菌研究史に大きく名を残した。

以上がウィキペディアによる南方熊楠の概説である。

子供のころから驚異的な記憶力の持ち主はまた、見せてもらった百冊を超える蔵書を後に記憶から書写するなど常軌を逸した天才であったが、授業に全く興味を示さない事も多くいつも教師に叱られていた。

大阪大学に脳が保存されている稀代の天才が、今また写真でヒヨッコリ現れた訳である。

多汗症からか裸で過ごすことが多く、禪ひとつで野山を駆け回る姿から娘達から天狗と恐れられていたという。発見された写真も「林中裸像」など山中での裸の写真が多いようである。

彼の亀が平成 12 年まで生きていたように彼には長生きしてほしかった。

南方熊楠が今に生きていたら、現代を生きる我々を一体どの様に評価するのであろうか。

